

現代のエコツーリズムのあり方
Present Ecotourism Trends and Models in Japan's

藤森 憲臣*¹ 田ノ口 景子*²

FUJIMORI Noriomi*¹ TANOKUCHI Keiko*²

*¹星城大学(SEIJYO University), *²早稲田大学(WASEDA University)

I. はじめに

現代日本は「平成」という年号を経てから現在 27 年。既に 25 年(四半世紀)以上の時が過ぎた。「観光立国」の概念設定を第 1 フェーズとし「昭和後期」に沸き上がり、「平成」はその概念に積極的及び発展的に取り組む第 2 フェーズを担ってきたはずである。

もちろん「観光」は、経済の浮き沈みも激しく影響し、また世界レベルの社会情勢も大きく左右するコマンドである。ところが、日本の「昭和後期」の走り出しの勢いは、残念ながら、今その影を忍ばせている。

近年、東アジアの中ではまれに見る主に中国経済の高まりを受けて、安定性の高い日本製品には注目が集まる。東アジア諸国(多くは、韓国及び中国、タイ)では、主に個の消費活動が貢献し、これにより日本経済の一部も安定感を出せている面は否めない。一般的に、「爆買い(大量購入)」と呼ばれる消費活動のことである。

名古屋を例に見ても、平成 26-27 年の現在にかけて都市近郊のビジネスホテルはほぼ毎日「満室」状態で稼動しており、聞き取り調査結果では「中国及びタイ、それに次いでインド、韓国からのお客様が多い」とのコメントがあった。

現在、海外からの旅行者の目的は「日本製品の購入」が多くであるが、これら日本への旅行者に向けて「総合観光(ツーリズム：時及び場所、物・事+人)」を提供しようと、各企業及び団体等での企画立案が水面下で動き出している実状がある。

II. エコツーリズムの定義

【第 1 回・東アジア国立公園保護地域会議(1993)】

"環境に配慮した旅行の推進または旅行者が生態系や地方文化に対する著しい悪影響を及ぼすことなく自然および文化地域を訪れ、理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう施設および環境教育を提供すること"

DEFINITION OF ECOTOURISM :

"The promotion of environmentally sensitive tourism and the provision of facilities and environmental education so that tourist will visit, understand and appreciate and enjoy natural and cultural areas without causing unacceptable Impacts or damage to their ecosystems or to local culture"

【NACS-J(日本自然保護協会)】

「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行形態」

(1)「エコツアー」と「エコツーリズム」2つの類義語

それぞれの定義及び相互関係について比較検討したい。エコツアーまたはエコツーリズムの「エコ」は、エコロジー、生態、環境、野生動植物、生態系等を広く指す。

ただし、「ツーリズム」と呼ぶ場合、「①ツアーの形式」のみをさすのではなく、「②ツアー形式及びそれを支える周辺条件、ツアー効果、成果など」を含む全体像。上記の定義には、「①エコツアーの形式」その後、「②エコツーリズムが成立する社会的条件」が記載。

ここで記述される「悪影響を及ぼさず、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむ」ために、また「環境に配慮した施設、環境教育、地域の自然と文化の保護、旅行形態」を目指すためには、周辺の諸条件の整備と実行がなされなければならない。「エコツーリズム」とは、それらの諸条件を含む全体像である。

対比し「エコツアー」の定義とは、参加者が「環境、自然（景観）、野生動植物、生態系を理解し、鑑賞し、加えて関する倫理観を向上させるべく、自然地域の中で「環境、自然（景観）、野生動植物、生態系を損なうことなく、適切な人数の参加によるツアー形式」。

「エコツーリズム」とは、前述形態の「エコツアー」が繰り返し行われることにより、地域の自然と文化の保護、地域経済に貢献する社会的しくみが作られることであり、これは単に旅行者の自覚や旅行業者の工夫だけで達成されるものではない。

ツーリスト及び企画者、ガイド、受け入れ側等の協力が必要であり、その「ガイドライン及び提言」が以下のようなものである。

(2)エコツーリズムにおける各分野の役割

① エコツーリズム

・悪い事例：利己的思考

「気晴しを目的とした団体旅行、自然破壊・地域文化への悪影響、自然や文化に配慮を欠くガイド、自然を破壊する大規模な施設、自然や地域からの利益収奪」

・より良い事例：利他的思考

「自然文化を訪ねる少人数の旅、自然保護、地域文化への敬意、環境倫理を身につけたガイド、自然への悪影響をさけた施設、保護地域や住民への利益還元」

② 旅行者の役割(エコツーリスト)

エコツーリストとしての自覚、自然と地域文化への敬意、生態系の一員としてふるまう、地域の伝統、経済に悪影響を与えない

③ ガイドの役割(ツアーオペレーター)

環境倫理を身につけたガイド、自然と地域文化の理解と解説、自然へのローインパクトの指導、地域文化との摩擦を防ぐ方法の指導

④ 送り手の役割(旅行会社)

エコツーリズムデザイナーとしての責任、自然と地域文化に配慮した旅行デザイン、旅行者、ガイド、地域コーディネーター、保護地域及び地域への利益還元

⑤ 受け手の役割(自然公園、宿泊施設等)

自然と地域文化への誇りを持つ、自然の収容力、環境への影響に配慮した施設、旅行者及び住民に対する環境教育の提供、保護地域や及び民に対する利益還元システム

(2-1)エコツアーリストのガイドライン

- ① 訪れる土地の文化を尊重する
- ② 訪れる土地の自然環境に悪影響を与えない
 - ・野生生物の生活を乱さない
 - ・保護されている生物の採集をしない
 - ・保護されている生物とその製品を買わない、持ち帰らない
 - ・ゴミを投げ捨てたり、土や水などを汚さない
- ③ 訪問する地域を事前に学習するよう努める
- ④ 旅行の経験を通じて環境問題を考える
- ⑤ 自然とのふれあいを尊重し、自然とともに生きるライフスタイルを身につける

(2-2)旅行企画者及びツアーコンダクターのガイドライン

- ① 「自然に親しむ旅行」から「自然保護につながる旅行」にしてゆく目的意識を持つ
- ② エコツーリズムの受け入れ体制が整った目的地を選ぶ
- ③ 企画段階で、地域に詳しい研究者や自然保護団体の意見を取り入れる
- ④ 団体旅行の場合は、募集人員 20 名以下を基本とする
- ⑤ 参加者に事前のオリエンテーションを実施する
- ⑥ エコツーリズムの主旨を理解した添乗員を養成する
- ⑦ その地域の自然と文化を熟知した地元のガイドを手配する
- ⑧ 地元経営の宿を選び、地元産のみやげを推奨する
- ⑨ 地元の人々とのコミュニケーションをはかる
- ⑩ 参加者や地元からのツアーの評価をフィードバックする

(2-3)宿泊施設のガイドライン

- ① 地域の自然、文化を表現するのにふさわしい立地条件を選ぶ
- ② 地域の自然、文化に悪影響を与えない規模とする
- ③ 地域の人々が中心になって、管理、運営、経営する
- ④ 施設、建物そのものが環境、エネルギーに配慮する
- ⑤ 宿泊者に過度な快適性を提供しない

次に宿泊施設の地域貢献について考えると、

- ⑥ 地域の自然と文化を解説
 - または地域の自然文化に関するガイド、展示、施設、ガイドブックの紹介
- ⑦ 地域の経済・文化のネットワークに入る
- ⑧ 地域の研究、保護、教育施設との情報交流を行う
- ⑨ 地域の産物を中心とした食事、販売物を提供する
- ⑩ 地域の環境教育に貢献する

(2-4)保護地域（国・地方自治体）のガイドライン

- ① 保護地域の収容力を科学的に設定し、自ら遵守すると共に関係者にそれを守らせる
- ② 保護地域の最大入れ込み数を設定し、過剰な利用にならないようコントロールする
- ③ 自然への接触が少なくインパクトが大きい利用を排除し、自然への接触が大きくてインパクトが小さい利用を促進する

- ④ エコツーリズムから、保護地域の管理に必要な資金を還元させるしくみをつくる
 - ・保護地域への入園料の徴収
 - ・特許料の徴収
 - ・施設使用料の徴収
 - ・土地使用料の徴収
- ⑤ 環境教育施設の整備と活用を適切に行う
- ⑥ 保護地域の自然や環境教育に関する情報提供
- ⑦ 調査研究に基づく、保護地域の生態系管理や環境教育プログラムの提供
- ⑧ エコツアーの企画者やガイドの研修・学習の機会を提供する
- ⑨ 保護地域内で行われる民間の環境教育活動を援助する
- ⑩ エコツーリズムを保護地域の利用計画の中心に位置づける
- ⑪ エコツーリズムによる地域振興を推進する
- ⑫ エコツーリズムのモデル事業を実施

自然への影響、地域への経済効果等をモニタリングし、ツーリズムにフィードバック

Ⅲ. 考察

前述の一部が実現している保護地域もある。しかし、大部分はまだまだ実現していないのが現状。理屈の上は理解していても、現実には可視化される・実施されないことには社会全体に広がってゆくのは難しい。

エコツーリズム普及を図る上では「モデル事業実施」が非常に大切なステップになる。管理当局及び地元自治体、NGO、民間企業等が協力してエコツーリズムモデル地域を選定し、ここに示されたガイドラインに沿って事業を実施してきている。事業の過程は詳しく記録し分析し、より良いエコツーリズムの実現のためにフィードバックされる必要がある。

エコツーリズムの社会実験は、日本国内及び海外の両方で考えられる。国内については、保護地域利用の内容を転換するきっかけづくりになり、また海外については新しい国際協力のモデルとしての価値を持つことになる。

Ⅳ. 結論

現代のエコツーリズムは提唱が始められてから、約 25 年もの時間経過がある。しかし、未だに当時の枠組みの現状維持に止まってしまっている。日本では年号が「昭和から平成」、世界では世紀が「20 世紀から 21 世紀」とその間に変遷した。そして時代の変遷と共に、世の中が求めるもの、世の中から求められるものは様変わりしている。

日本でも法整備として「エコツーリズム推進法(2007)」が施行され、既に第 1 フェーズは過ぎた。今後は、第 2 フェーズとして次の段階へ進んでいく必要がある。

現在、第 2 フェーズを見据えたこれからの観光分野(産業でも、学問でも)へ「ツーリズム」で一石を投じられるよう行動していく。

産業分野では、顧客の「単純なツアーの提供」から「ツーリズムへの同調」へ進化できるように賛同者を募り、趣旨に合う旅行企画の提案及び実践を行っていく。賛同者は企画への顧客で複数回に渡る参加が条件である。また学問分野では、現時点で「環境倫理」の講義の場でエコツーリズムを取り上げ、次世代への教育でも継続した実践が有効となる。その他、社会貢献としてこれから求められるエコツーリズムを実社会にて形にできる「人材の発掘及び人材の育成」にも取り組んでいく必要がある。

V. 引用文献

- 1)NACS-J(日本自然保護協会)：資料集その4 エコツーリズムの定義．公益財団法人日本自然保護協会.URL： www.nacsj.or.jp/katsudo/ecotourism, 1994.
- 2)JES(日本エコツーリズム協会)：エコツーリズム．NPO 法人日本エコツーリズム協会．URL： www.ecotourism.gr.jp, 2002.